書き抜き読書ノート 2196	2016 年 8 月 20 日

鳥飼玖美子著「本物の英語力」講談社現代新書、講談社 2016 年 2 月 20 日刊を読む

ハチャメチャと完璧の間を狙う

１．（１）自分が話す英語を相手に分かってもらうために必要なことはいくつかありますが、まず大切なのは、英語の音の出し方の基本を知ることです。
（２）きれいな発音でなくても構いませんし、ネイティブのような英語でなくても良いのですが、英語の音の基本を守らないと通じません。
（３）「英語の音の基本」とは、具体的には、母音と子音、そして強弱のリズムです。

２．（１）第一に母音です。
（２）日本語は「あいうえお」の 5 音素なのに、英語は 20 音素もあります。
（３）その上、英語と日本語では口の動かし方からして全く違います。
（４）母音をおろそかにせず、日本語では大げさに聞こえるくらいに発音しないと、「骨」（bone）が「生まれる」（born）に聞こえてしまいます。
（５）「鳥」は bird ですが、これを「バード」と日本語的に発音すると、bad に聞こえてしまいます。
（６）[ir]は、「アー」とは違う、日本語にはない音なのです。

３．（１）award という英語は「賞」という意味の名詞、「賞を授与する」という動詞ですが、最近は日本語の中で「アワード」というカタカナで盛んに使われています。
（２）しかし、アクセントの場所が第 2 音節ではなく第 1 音節[a]に来てしまっている上に、第 2 音節[ward]の中の母音[á]の発音が日本語の「ア」なので、英語とは似て非なる単語に変身してしまいます。
（３）この母音はカタカナでは表せない音で、強いて説明すれば「ア」と「オ」の間なのですが、それを日本語の「ア」としてしまうと、その時点で英語には聞こえなくなり、通じなくなってしまいます。
（４）英語の“award”は日本語の「アワード」ではないのです。

４．（１）次に子音です。
（２）日本語では 16 音素なのに、英語は 24 音素あり、摩擦音（/f//v/など）が多くあります。
（３）それに加え、英語の子音は日本語と違って独立独歩です。
（４）日本語では子音の後に原則として母音がつきますが、英語では母音などを後につけず子音だけでバシッと終わります。
（５）たとえば、英語の cat を日本語的に「キャット」と発音すると[k æ to]と余計な母音[o]が入ってしまい、リズムが崩(くず)れて英語とは聞こえなくなります。
（６）本場のハンバーガーが食べたくなって「マクドナルド、どこですか？」と聞いたのにアメリ

カで通じなかったとぼやく日本人は、子音の後に母音を入れて〔ma/ku/do/na/ru/do〕と発音していた可能性があります。

（7）英語の McDonald's は、母音をいちいち加えず、D の後の[o]という母音だけを思いきり強く発音します。

（8）日本語式に発音すると音節の数が増えてしまうので、まるで英語には聞こえず「ハア？」と怪訝な顔をされてしまうことになります。

5．（1）問題はそれだけではありません。

（2）英語には、子音がいくつもくっ付いてつながる。「子音連結」という性質があり、これが日本人だけでなく多くの非母語話者を苦しめます。

（3）例えば“simple”というシンプルな単語でも、[m][p][l]という 3 つの子音がつながっていて、最初に出て来る[s]を、[sh]と聞こえないように発音した後に、母音を入れないで 3 つの子音を発音するのは、それほどシンプルな話ではありません。

（4）日本語の「シンプル」は英語話者には[shin-pu-ru]のように聞こえてしまうので、英語の simple だと聞き取ってもらうには、意識して英語らしい音を出す必要があります。

6．（1）milk などは[l][k]と 2 つの子音がくっ付いているだけですが、難易度の高い[l]が入っていることもあり、大変です。

（2）だって「ミルク」って言えば大丈夫じゃないの？と思っていると大間違い。

（3）日本語的に[mi/ru/ku]のように発音すると、余計な母音[u]が 2 ヵ所も入り、リズムはガタガタに崩れて英語の milk とは理解してもらえません。

（4）子音の[l]は、舌に力を入れて上顎につけてから、すぐに離し、間に何も余計な音を入れずに子音の[k]を単独でキリリと発音して終えるのが英語の milk なのです。

7．（1）さらにいえば、英語は、どこを強く発音するかが決め手となる強弱リズム重視の言語です。

（2）リズムがすべての英語は、平坦な日本語に慣れている身には異質です。

（3）これは、ネイティブ・スピーカーが話す英語をただ聞いているだけでは身につきません。

（4）どうやってその音を出すの？と聞いてみても、母語として英語を使っているネイティブ・スピーカーは、いちいち考えないで発音していますから、何をどうしたら良いのかうまく説明ができません。

8．（1）そこで必要になるのが英語音声指導の専門家です。

（2）2015 年度放送の NHK「ニュースで英会話プラス」では、英語音声学専門の松坂ヒロシ早稲田大学教授が、大きな歯の模型を使って、舌を歯の裏につける、頬の内側に広げるようにして離す、など丁寧に指導しました。

（3）そして、その通りにやってみると、あら不思議。

（4）日本語風に「グレート[gure-to]」と言っていた人が、[g]と[r]の子音連結がきちんとできるようになり、子音の[t]で明快に打ち切ると[greit]となり、分かりやすい英語に改善されます。rival というなかなか難しい単語も、日本語の「ライバル」から脱し、英語らしい[r][v][l]に変身するのです。

９．（１）もっとも発音は単語レベルだけで解決するものではなく、センテンス全体のイントネーションも相手の理解に関わってきます。

（２）ふだんの会話では、単語ひとつで勝負するだけでなく、単語をどうつなげるかも、分かってもらえるか、もらえないかの運命を左右します。

（３）rival（競争相手）という単語は、それ自体が難しい発音ですが、“Who is the biggest rival of the current prime minister?”（現首相の最大の競争相手は誰ですか？）のような、[r]が満載の単語をつなげて聞き取ってもらえるには、何度も何度も練習することが欠かせません。

10.（１）ピーター・バラカンさんは、英国の大学で日本語の読み書きを勉強し、来日してから日本語での会話を学んだそうですが、夜の井の頭公園（東京・吉祥寺）で、自分が納得できる音が出るまで日本語の発音をひたすら練習しながら歩き回ったとのことです。

（２）そのバラカンさんは、発音だって小さい時からやる必要はない、大切なのは、「意欲と努力だ」と断言しています。

P26 ～ 31

＜コメント＞

英語学習には様々な階段がある。その第一歩は「発音」であることは誰しもが大賛成をする。どのように「発音」を身に着けたらよいのか。鳥飼玖美子先生の教えは具体的でわかりやすく、役に立つ。是非、御一読を。

― 2016 年 8 月 20 日（土）　林　明夫記―